

情報モラル教育は、子供の未来のために、 「光を見せるプラスの教育」

ネットモラル

広教ニュースレター

Vol.37

広教 2023.3
HIROKYO

<https://www.hirokyou.co.jp/>

GIGAスクール以前から、情報モラル教育や情報活用能力の育成に力を入れてきた仙台市。なぜ情報モラル教育を重視してきたのでしょうか。その視線の先にあるのは、子供たちが大人になって社会に出たときのために、という長期的な展望でした。

「何から教えればいいか」を
「NetモラルCBT」が
教えてくれた

「情報モラル教育をしなければ」とは、先生方はわかっているんです。GIGAスクールで一人一台端末を使うようになって、その重要性がますます高まっているのも、よくわかっています。しかし「何から始めればいいのか」「どう教えればいいのか」が、わからない。それが先生方の悩みでした。

そこで仙台市では、全ての市立小中学校で広教の「NetモラルCBT」を実施し、子供の実態を調査しました。すると、学校ごと学級ごとに、子供たちの様々な課題が次々と浮き彫りになりました。

たとえばある中学校では、「肖像権」に課題があることが判明しました。端末で友だちの写真を撮ってクラウドにアップするとき、メイン被写体の子はもちろんのこと、後ろに偶然映り込んだ子の肖像権にも配慮しなければならぬことに、気づいていなかったのです。ほかにも、「しっかり指導してきたから、この分野は大丈夫だろう」と安心していただけに実は定着していなかったり、「そもそも悪いことだと認識していなかった。むしろ良いことだと思っていた」などの課題が、明らかにありました。「NetモラルCBT」が、「この子たちに、まず何を指導すべきか」を、指し示してくれたのです。道しるべを得た先生方は、目の前の子供たちの実態や課題に合わせて、「Netモラル」を使った指導や学習が活発化しました。CBTの結果を

保護者とも共有した学校もありますが、「子供がどんな課題を抱えているのか、何から指導すればいいかが、よくわかった」と、とても好評だったそうです。



仙台市教育委員会 教育指導課
情報化推進係 指導主事
坂本 新太郎 先生

自ら学び始めた子供たち
教科書のように使うことも

すると、子供たちが目に見えて変わり始めました。たとえば学習後の感想も、今までは「こういうことをしてはいけない」で終わっていたのが、「こういうことに気をつけながら、上手に使っていきたい」と、前向きに変わっていったのです。

先生が指示せずとも、「Netモラル」を使って自習する子も増えました。休み時間や空き時間に「Netモラルeラーニング」を使って学んだり、端末を家に持ち帰って保護者といっしょに動画を見て話し合ったり。友だちのそんな姿に影響を受け、クラス全員の情報モラルが高まっていきました。「Netモラル」には、問

題が発生したときの指導や予防にとどまらず、クラス全体を学ぶ集団に成長させていく効果があると、感じています。その証拠に、子供たちは「個別最適な学び」の中で、「Netモラル」をまるで教科書のように活用し始めています。たとえばある小学校では、六年生が一年生に端末やネットの使い方を教える活動の中で、「Netモラル」を参考にブレゼン資料を作成し、一年生に披露しました。ほかにも「Netモラル」で情報モラルのポイントをつかんだ上で、もっと深掘りしたいことをネットなどで調べ、自分なりに情報モラルを追究していく子供も増えてきています。

社会に出てから必要な力を
学校でも家庭でも育んでいく

情報モラルは「なまもの」です。技術の進化や世の中の動きで、どんどん変わっていくものです。「してはいけない」というマイナス教育では、時代の変化に対応できません。「上手に使用えば、自分にとっても社会にとってもメリットがある」という、「光を見せるプラス教育」であるべきです。保護者としても、ICTを生活や仕事で上手に使えるようになって、人生を豊かにしてほしい、より良い社会づくりに貢献してほしいと願っていることから、マイナス教育ではなくプラス教育を望んでいるのではないのでしょうか。

現在、情報モラルを含む情報活用能力は、「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけられています。各教科の学びを進めていくためにもこうした力は不可欠です。そして学校を卒業して社会に出てから、仕事や生活をしていく上でも、欠かせない力です。情報社会がどうあるべきかを考え、情報社会でより良く生きていくために、より良い社会に貢献していくために、情報モラルを含む情報活用能力を育むのです。こうした広い視野を、先生も保護者も持つてほしいと思います。

「Netモラル」は、その助けになります。トラブル回避や予防の学習にとどまらず、自分の生活を豊かにする力、情報社会に貢献する力を育む教材だと感じています。授業でも、空き時間でも、そして家庭でも、使ってみてほしいと思います。学校と家庭が手を取り合って、子供たちの未来に必要な力を育んでいきましょう。

情報社会で必要な力を 学校でも家庭でも育んでいく

GIGAスクールで子供たちが1人1台端末を使うようになり、情報モラルを含む情報活用能力の重要性がますます高まっています。子供たちがこれからの情報社会がどうあるべきかを考え、より良く生きていくためにも、情報モラルを含む情報活用能力を育む必要があります。

夏休み前と冬休み前に、仙台市の全小中学校で「NetモラルCBT」を実施いたしました

研究の成果 から

「Net モラル CBT」のようなオンライン教材には、アクセス回数やアクセス日時、各問題の正答率などの情報が匿名化されてログとして残ります。このログからは、例えば年度の序盤にはコンピュータの使い方に関する教材がよく用いられていること、長期休業の前後にはネット依存等に関する教材がよく用いられていることなど、いつ何を指導すべきかというヒントが得られています。また、教材をよく活用している学校の方が正答率が高いという効果も明らかになっています。個別最適な学びが求められる中、各自の学びをエビデンスベースで検討できる意味でも、「Net モラル」が役立ちそうです。

出典：板垣翔大、小泉陽、田坂和広、佐藤和紀、堀田龍也（2022）アクセスログからみたGIGAスクール構想1年目の情報モラル教材の利用傾向、全日本教育工学研究協議会第48回全国大会、1-C-1
小泉陽、板垣翔大、田坂和弘、佐藤和紀、坂本新太郎、堀田龍也（2023）「NetモラルCBT」の活用前後の情報モラルの理解度の比較、宮城教育大学技術科研究報告、25、印刷中



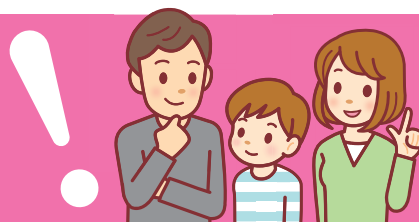
宮城教育大学教科教育学域
（技術科教育）

講師 板垣 翔大 先生

「Net モラル CBT」の「CBT」は、「Computer Based Testing」の略、すなわち、コンピュータを使ったテストのことです。「テスト」というと、その人の最終的な評価や可否を導くもののように聞こえますが、それを定期的に行うことで、自分は何がどこまでできていて、今後何を学習すると良いのかを、各自が常に把握する参考情報になります。仙台市での取り組みは、それをCBTで行うことで、その後の学習への支援として、役立ちそうなコンテンツのレコメンドを「Net モラル」から受けて学習を進めることができた、という好事例といえます。

家庭での学びのチャンス

情報機器を使う上で、親子で守りたくなるルールを作るには、
しっかり話し合うことが大切。
そのルールを作るタイミングを考えてみましょう。



しっかりと
話し合って
ルールを
決めようね

たとえば…

- アプリをダウンロードするとき。
- 利用料金の明細が届いたとき。

「金融教育」 のチャンス!!

新たなアプリをダウンロードするときはお金の話のチャンス！また、利用規約などを確認して、安全性も確かめましょう。

おすすめルール

- ・アプリのダウンロードは保護者に確認してから行う。
- ・毎月いくら通信費を払っているか意識する。など

親子でお金の話をすることは、高額課金を防ぐだけでなく、普段の生活に必要な金銭感覚を身につけることにもつながります。

たとえば…

- 友達とのメッセージのやりとりで悩んだとき。

「コミュニケーション」 のチャンス!!

見えない相手にメッセージを送ることは大人でも難しい。悩んだときがチャンスです！

おすすめルール

- ・相手の立場になって読んでからメッセージを送る。
- ・自分が言われて嫌なことは言わない。など

文字だけで気持ちを伝えることは大人でも難しいですね。
親子で一緒に学びましょう。

たとえば…

- スマホを買ったとき。
- 初めて端末を持って帰ったとき。

「時間を意識する」 チャンス!!

初めてスマホなどを使用するタイミングは、ルールを決める最大のチャンス！

おすすめルール

- ・何時まで使用するか、1日何時間使用するか決める。
- ・寝る1時間前は利用を控える。など

子供がルールに納得し自分で使用時間を意識できるように、親子でしっかりと話し合いましょう。